

2 4. 職場問題の検討を通し師長が主体的な行動をとることができる

～身体拘束手順導入後の現場の問題に取り組んで～

東京女子医科大学東医療センター 中村 千恵子

【背景】

師長会のほとんどが報告の場になっている現状より、職場の問題を持ちより話し合う事で活性化したい。そのためには各師長が主体的になることが重要である。職場の問題をどのように解決していくか、師長会での話し合いを通し各職場へ、さらに院内全体への動きにしていく事が必要である。

院内の身体拘束手順は平成 17 年に作成したものを運用していたが、一部で承諾書を取らずに身体拘束を行っていた現状があり、身体拘束の承諾書作成から新たな書式の追加をして身体拘束手順書の内容を大きく変更した。

内容については師長会で検討し、入院時に身体拘束の説明を行ない承諾書を頂く事で決定した。リスクマネージャー委員会へ看護部の意見を代表して持って行った。しかし、いざスタートとなった時に、この内容では自分の科は無理、必要のない科もあるのではないかなど、様々な意見が主に医師の方から提出された。

師長は身体拘束手順を新たに職場に導入したことで、医師からの問題提起や職場スタッフへの導入等関わらなければならない事がある。導入後の職場の状況を師長が丁寧に見ていく事、困りを自分の職場から全体へ伝え検討する事、師長会で自分の意見を表現する主体的な行動が必要である。このことが師長会の活性化であり主体的に行なっていく事の第一歩であると捉え取り組んだ。

【実践計画】

1. 9月・10月・11月に現状調査として、①身体拘束件数 ②承諾書の有無 ③身体拘束の種類 ④困り・問題の調査
2. 師長会・リスクマネージャー委員会へ実践計画 1. の結果について報告
3. 10月・12月の師長会終了後「グループ成長のイベントリ」用紙の記入
4. 2月 各師長の主体的活動への変化の自己評価を聞き取り調査
5. 2月 施設訪問 東京慈恵会医科大学附属青戸病院

【結果】

現状調査の結果、身体拘束件数と承諾書の件数に差がある部署が 2 部署あった。

身体拘束についての話し合いは、10月・12月の師長会で検討し、10月は身体拘束の件数や承諾書の有無を調査する用紙に対する討議内容であった。12月は身体拘束件数の調査を看護部で続けていることについて、病院全体で取り組む意味でも看護部で行なうのではなくリスクマネージャー委員会で行なう必要性が出された。今後は医療安全委員会で行なっていく事が決まった。各職場から身体拘束についての困り・問題についての発言は無かった。

各師長のグループ成長のイベントリ結果は、10月より12月が「受容」「コミュニケーション」「目標形成」「リーダーシップ」とも懸念の数値が下がっていた。1・2年目師長の数値も同じ傾向だったが4つの懸念の数値は高かった。10月に3.7の数値が12月には3.1、1・2年目師長は10月に4.3の数値が12月には3.5という数値であった。

自己評価の聞き取りは、全員に出来ていないが主体的活動への変化はないとの返答であった。しかし、聞き取りは30分と時間を決めていたが、看護部に対する意見があり2時間

以上になることが珍しくなかった。

【評価及び今後の課題】

現場の問題という事ばかりに視点を置き職場の工夫、上手くできた体験を話すことはできなかった。自分自身批判的な見かたになっており自分の傾向が見えた。師長がどのような考えを持ち行動したかを報告するだけでも意味のある話し合いができたのではないかと考える。

12月の師長会では、師長が疑問に思う事を話すことができ、このことがグループ成長のイベントリーの数値を下げたと推測される。主体的行動の変化は見られなかったが、聞き取り調査から師長は看護部に対する自分の考えを持っており、言い換えれば主体性はあると言える。

2月の師長会で、職場から疑問に感じていた事が提案された。話し合いの結果で、職場毎にバラバラに行なわれていた書類が整備される事になった。小さなことでも丁寧に積み重ねる事、失敗してもPDCAサイクルを廻していくことが大切である。

東京慈恵会医科大学附属青戸病院の師長会を見学させて頂き、皆が同じベクトルに向いていると感じた。印象に残っている事が「提出する懸案について分からない師長は知っている師長に聞く事、知っている師長は知らない師長へ自分から声をかけ協力すること」協力体制がしっかりとできていた。同じ規模の病院でも組織体制の違いが大きいと感じた。具体的な施設訪問計画が立案できなかったため、訪問が2月になり今回の取り組みへの活用には至らなかったが、学び得たキポイントは活用していきたいと考えている。

看護部長・副部長の会、師長会を組織の中で機能させていくために、師長会の役割を明確にして師長自ら行動出来るようにしていくことが今後の課題である。